

張竹坡「竹坡閑話」「冷熱金針」訳注稿

安部 浩子

1. はじめに

『金瓶梅』の版本は大きく三種類に分けられる。詞話本と通称される『新刻金瓶梅詞話』、崇禎本と通称される『新刻繡像批評金瓶梅』、第一奇書本と通称される『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』である。このうち最初に刊行されたのは詞話本で、万曆四十五年（1617）の序を持ち、作者によって書かれた原初の姿を最もよく留めたテキストだといわれている。次に刊行されたのが崇禎本で、詞話本の本文を改訂し、眉批・夾批が付されている。崇禎年間（1628～1644）に刊行されたとしいため崇禎本と呼ばれる。第一奇書本は、崇禎本系のテキストに張竹坡（1）（1670～1698）が批評を施して刊行されたもので、康熙三十四年（1695）の序を持つ。第一奇書本が刊行されると、この系統の本が『金瓶梅』の通行本となった。第一奇書本の本文は基本的に崇禎本のものをそのまま用いているため、第一奇書本が広く読者に歓迎されたということは、すなわち張竹坡による評の影響力が大きかったということを物語っている。

『金瓶梅』張竹坡評については、日本での研究は多くないが、中国や米国では関心が高く、中国小説批評史において重要な位置を占めると評価されている（2）。牽強と思われる箇所が多いこともいわれているが、『金瓶梅』を読み解くうえで示唆してくれるものは、やはり現在においても大きいと考えられる。

第一奇書本には巻頭に、謝頤による序のほか、「竹坡閑話」「金瓶梅寓意説」「苦孝説」「第一奇書非淫書論」「第一奇書金瓶梅趣談」「雜録」「冷熱金針」「批評第一奇書金瓶梅讀法」

「凡例」「第一奇書書目」(3)が収められ、各回の前に総評(回評)、本文には夾批・眉批・旁批が付されている。今回「竹坡閑話」「冷熱金針」の二篇を選んだ理由は、これらが、特に「冷熱」に関してまとまった記述を持ち、張竹坡の「冷熱」に対する考え方を知るうえで有益だと思われるからである。「冷熱」とは、『金瓶梅』解釈上の観点の一つで、「冷熱金針」において「この書物の大切な鍵」(4)と指摘されているものである。

本稿では、テキストとして『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』(王汝梅校注、吉林大学出版社、1994。以下、テキストと略す)(5)を使用している。訳文は、大方の意を伝えることを第一としたため、かならずしも逐語訳とはなっていない。読みやすさを考慮し原文にない表現を補った箇所や簡単な注釈は丸括弧()によって示した。訳注で本文に触れる場合も、上記テキストによる。

2. 「竹坡閑話」訳

『金瓶梅』、どうしてこの書物があるのだろうか？答えて言うには、「この書は仁人志士・孝子悌弟が時を得られず、上にはこれを天に問うことができず、下にはこれを人に告げることができず、悲憤して憂いを述べ、穢言を書いてその憤りを晴らそうとしたのである」と。しかし、上にはこれを天に問うこともできず、また下にはこれを人に告げることができないのだから、穢言を書いてその仇をはずかしめようとしたとはいっても、私がいうところのこの悲憤して憂いを述べる者(『金瓶梅』の作者)は、それではまだ満足していないのである。そもそも結局のところ(それでは)自分の志を遂げることができないのだから、その文章はいよいよ毒々しくなり、心はいよいよ悲しみ、いわゆる「含酸抱阮(辛い気持ちを抱いて阮咸を抱く)」(6)者は、もとより孟玉楼一人だけであり、(それは)作者が自分自身を喩えていることがわかるのである。ではその文章で自分の憤りを晴

らすこともできず、結局は「含酸抱阮」となるのに、作者はどうしてさらに書かなければならなかったのだろうか？答えて言うには、「作者はもとより仁人であり、志士であり、孝子悌弟だからである」と。書くまいとしても、自分の親の仇に対して、どのように処すればよいのか？書くまいとしても、自分の兄の仇に対して、どのように処すればよいのか？まして自分に仇となるものは天下万世であるからには、どのようにこれを公に論ずればよいのか？自分は上は天子に告げて、その隠情を申し述べることもできず、下は士師に告げて、(同情を得て)その平静を求めることもできず、そのうえに荊・聶(7)(のような刺客)を慌しく手に入れて事を解決することもできないのだから、つまりどうすることもできないということになるのみであろう！

(しかし) どうすることもできないということは、仁人志士・孝子悌弟の心をまた大いに傷めるのである。(そこで)色々と考えてみるに、ただこの筆(8)だけが自分の憤りを少しばかり晴らすことができるので、西門氏を借りてこれを発したのである。だが、私はどうして作者が必ずや仁人志士・孝子悌弟であるとわかるのか？(それは)作者が孝哥のことを以て結末としているからである。「磨鏡」の一回(第58回)は、みな『蓼莪』(9)(親孝行)のことが書かれている段であり、しくしくと泣く声が人の心を刺すのは、それが孝子だからである。(巻頭で、義理の)十兄弟を以て一人の実の兄(10)(武大)に対峙させ、巻末でまた二搗鬼(韓二)を以て急場に必要の人としていることについては(11)、(仮の人間関係が)甚だしいことで(12)、『殺狗記』(13)もこれほどはっきりとはしていないのである(14)。

最近これを論じたことがある。天下で最も真(真実・本物)なるものは、倫常に及ぶものはなく、最も仮(嘘・偽物)なるものは、財色に及ぶものは無い。そして倫常の中で、君臣・朋友・夫婦の如きものは、力を合わせてそれを完成することがで

きるものであるが、一方で父子・兄弟は、水が源を同じくするように、木が根本を同じくするように、流れが分れ枝が伸びても、（その倫常は）天然自成のものである。それなのに（現実には）意外にも仮（義理の）父・仮子・仮兄・仮弟の輩がいる。ああ！これは仮とすべきであって、真であるはずがない。それなのに富貴だが仮なる者は、真とすべきとし、貧賤にして真なる者はまた仮だとする。富貴は熱であり、熱はすべて真であるとし、貧賤は冷であり、冷はすべて仮であるとする。「冷熱」の二字について深く考えないので、ここまで真仮をさかさまにしているのだ！そして冷熱はまた定まらないのである。今日は冷でも明日熱ならば、今日の真は仮で、明日の仮は真である。今日は熱でも明日冷ならば、今日の真なるものは、すべて明日は仮なるものとなる。なんと悲しいことか！もともと嗜欲のために、財色に迷うこととなり、財色のために、冷熱をなすこととなり、冷熱のために、真仮を乱すこととなる。仮なる者が（世に）存分にへつらうため、真なる者はみなその害毒に遭うことになる。だからこの書（『金瓶梅』）はただ財色のみを罪とするのである。ああ！仮なる者は一人が死ねば百人が浮かばれるが、真なる者がひとたび傷つくところのようにしても贖い難い。この世の中には仮で集まることを楽しむ者ばかりで、（そのような者は）肉親を大切に思う心は持っていないのである（15）！

作者は不幸にも、自らその難に遭い、これを吐き出すこともできず、呑み込むこともできず、引っ搔くこともできず、泣き叫んでも益なく、それでこの書物（『金瓶梅』）を借りて自らを晴らしたのである。その思いは悲しむべきであり、その心は哀れむべきである。故にその開巻冒頭では、「冷熱」をもって題目とし（16）、巻末のしめくくりではまた「真仮」をもって題目としたのである（17）。『金瓶梅』中には仮の父子（18）に続き、間もなく仮の母娘（19）が登場する。仮の兄弟（20）に、やがて間

もなく仮の弟妹(21)が登場する。仮の夫婦(22)に、やがて間もなく仮の外妾(23)が登場する。仮の親戚(24)に、やがて間もなく仮の孝子(25)が登場する。(かくして登場人物は)おもねりへつらってあくせくする者でいっぱい、それは(あたかも)みな仮の舞台背景における傀儡(のよう)である。ああ! 真仮(26)を見分けようとするならば、その冷熱によるべきである。その真を守ろうとするならば、自分(が大切に思う)孝悌を喜ぶべきである。しかし、自分の実の父子がすでに毒されてしまったなら、どうすればよいのか? 自分の実の兄弟がすでにおちぶれてしまったなら、どうすればよいのか? 上には自分の君に害を及ぼし、下には自分の友を辱め、そのうえ今にも自分の同類に災いを及ぼそうとしたなら、どうすればよいのか? 自分は孝であろうとするのに、すでに不孝の人とならされ、悌(27)であろうとするのに、すでに不悌の人とならされ、忠であろう信であろうとするのに、すでに君のそばから追放され、友のそばから引き離されてしまった。日夜嘆息し、天を仰いで大きく息を吐いて(思う)、自分は何の罪があつてこのようなめにあうのであろうか? 答えて言うには、「仮によって集まっているからである」と。ああ! 人がなぜ仮をするのかもやはり冷熱にかかわっていることを知っているのか? 仮子(義理の子)が仮父(義父)の子に収まっているのは、熱によるのである。仮弟・仮娘・仮友も、みな熱によるのである。(だが)あの熱にうかれる者は、そもそも浮雲に集まり散ることがあることをも知らないのである。いくばくならずして冰山は崩れ落ち、いくばくならずして閥閥(功労と経歴を書いて門にかけた札)は朽ちてしまうのだ。もしも世の中でおのれの仮を追って他人の真なるものを損なうならば、おのれの真なるものもまた瞬時に漂泊無依となる。(ならば)仮を行う理由はどこにアろうか? 仮を行った者はこの時になって、かつて仮を行ひ人に害を及ぼしたこ

とをきつと悔いるであろう。しかしながら人の真なるものは、すでに葬られて久しい。（世の中には）仮の傀儡のようなものばかりが残されているので、（真面目な）人は真に恨みを抱く。

（その）恨みは深く吐き出すことができないと、日々醸成されて、蒼蒼たる高天、茫茫たる碧海（のようにはてしなく積み重なり）、いつ（これを）忘れることができようか！（かくして）涙は顔を洗うように流れ、悲しみに心が痛むが、たとえこの仇を百割しても、何の益があろうか！このようなひどい悲しみは、一時一刻と、千百万年も醸成されて（積み重なり）、（しまいには）死んでも、壊すことは全くできなくなるだろう。これが孟玉楼が阮咸を弾きながら登場し(28)、韓愛姐が阮咸を抱いて退場する(29)理由であり、千秋万歳、この恨みは綿々として絶える時がないのだ。（また）だから普浄（普静）和尚を用いて（仮の）罪を消し去ろうとして偈語でもってこの小説を終えているのだ（第100回）。（だが）そもそも（その仮の）罪は消し去ることができない時には、転じてその消滅を求めるが、ではこの一刻の悲しみは、どのようにして心に忍ぶべきなのか？（さて）憤りも百二十分であるうえに、悲しみも百二十分あるのだから、『金瓶梅』を書かなければ、どのようにして（憤りや悲しみを）解消できようか？（作者の憤りや悲しみは）何と甚だしいことか！仁人志士・孝子悌弟（であるこの小説の作者）は、上にはこれを天に告げることもできず、下にはこれを人に告げることもできなかったので、悲憤して憂いを述べ、穢言を書いて、それでその憤りを晴らそうとした。自ら辛さを忍ぶと言うが、泣きわめくのではなく、匕首を懷にいれ分銅を囊に入れて(30)、その人に報いるのも、もう一つの行動である。つまり作者はもとより自ら志を持っていたが、荊・聶となることを恥じて、仇討ちの意義を（この小説の）百回の微妙な言い回しの中にことよせたのである。古来刀筆の鋭さによって人を誅殺しなかったこと

があったらうか！これが『金瓶梅』がある理由である。

それでは『金瓶梅』、私はまたどうしてこの書物を批評するのか？私はその文章が百回もの長篇でありながら、いくつもの伏線や照応が、（実は）一本の糸から出ていることや、様々な筋立てが、いささかも繋ぎ目を露わにしていないことを好む。静かな窓辺に一人坐して、史書を読んだり、諸家の文章を読んだりするうちに、少しばかりの暇があって、たまたまこの書を一読して（次のように）言った。「このように妙なる文章は、その秘訣を指摘して明らかにしないならば、作者の千秋の苦心を無にするに等しい！」と。（しかし）長い間自信がなく(31)、すぐに筆をとってこれを実行することができなかった。思うにその書物の細やかであることは牛毛のようで、千も万もの根が共に一体に備わり、作品全体の連絡があり、伏線があり、千里の照応があるが、見えるところは少ないので、仰ぎ見ながら（この書を批評することから）退かざるを得なかった。それから窮愁にせまられ、世情に翻弄され、（愁いを）解消し難かった時に、自分で一冊の世情の書を書いて、憂鬱な心を晴らしたいものだと思った。幾度も筆を下ろそうとしたが、前後の設計・構想に甚だ力を費やし、そこでしかたなく筆を置いて（次のように）言った。「私はしばらく他人の世情の書について、その前後の構想するところを、細かく指摘しようと思うが、（その理由は）一つには（それで）私の憂鬱な心を晴らすことができ、二つには古人の書を批評することは、私が今また一冊の書物を構想することでもあるからだ」と。私にはまだ（自分で）書いたものは無いが、私が考えるところの従来 of 創作手法は、すべてこれに備わっているのではなからうか！そうしてみると私は（あくまで）自ら私の『金瓶梅』を書くのであって、どうして他人のために『金瓶梅』を批評する暇があらうか！

3. 「冷熱金針」 訳

『金瓶梅』は「冷熱」の二字によって話を始めるが(32)、そもそもこの二字がこの書物の大切な鍵となっていることを誰が知らないだろうか？しかし、その最も肝心なところは、まだ理解していないのである。そもそも肝心なところはどこにあるのだろうか？答えて言うには、「温秀才・韓夥計（番頭）にある」と。なぜか？韓（韓は寒と通じる）は冷の別名で、温は熱の余気だからである。故に韓夥計が「加官」（第30回）の後にたちまち登場するのは（第33回）、熱の中の冷の便りである。そして温秀才が「磨鏡」（第58回）の後でやっと登場するのは(33)、冷の字の先触れである。禍福が相関連してやって来ることや、寒暑が気を盗むのは、天理がそのようであるからだとわかるのである。しかし、熱と寒とは対をなし、冷と温とは対をなすが、そもそも熱は温の極みであり、寒(34)は冷の極みである。故に韓道国は冷の局面の後に登場するのではなく、熱の局面の先に登場して、熱は未だ極まっていないが、冷はすでに極まったことをあらわす。温秀才は熱の場面の中に登場するのではなくて、冷の局面の初めに登場して、冷は盛んになろうとして熱が尽きようとしていることをあらわすのである。ああ、この書物が冷を言い熱を言うのは、どうして単に花の如く火の如くであるのみだろうか！そしてその肝心なところはこの二人の描写を以てなされているのに、数百年來の読者は、韓・温の二人を描いた理由を理解しない。（こうしてみると）もとより書物を書くことは難しいが、書物を読むことはより一層難しいということこそ、本当のことではないか！

4. 注

- (1) 張竹坡の生涯については『張氏族譜』所収の、弟・張道淵による「仲兄竹坡伝」に詳しい。この資料は吳敢『張竹坡与《金瓶梅》』

- 研究』（文物出版社、2009）にも掲載されている。
- (2) 田中智行「『金瓶梅』張竹坡評の態度—金聖歎の繼承と展開—」（『東方學』第125輯、2013）
- (3) テキストの掲載順。版本によっては収録されていないものや掲載順の違いがある。第一奇書本の諸版本については王汝梅『金瓶梅版本史』（齊魯書社、2015）に詳しい。これらのうち「批評第一奇書金瓶梅読法」については田中智行氏による訳注がある（田中智行「張竹坡「批評第一奇書金瓶梅読法」訳注稿（上）」、『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』第21巻、2013、85～104頁。同「張竹坡「批評第一奇書金瓶梅読法」訳注稿（下）」、『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』第22巻、2014、95～110頁）。
- (4) テキストの本文は「一部之金鑰」（テキスト28頁）。
- (5) テキストは吉林大学図書館蔵本を底本とし、大連図書館蔵本（本衙蔵板翻刻必究本）等を参校した排印本である。テキストの校注説明によると、本文に関して底本と参校本との間に相違があった場合は、明らかな誤刻を除き、底本の記述をそのままとしている。
- (6) 第75回の回目は「因抱恙玉姐含酸 為護短金蓮潑醋」。孟玉楼はその登場の際に月琴が得意であると紹介されている（第7回）。張竹坡は月琴と阮咸とを同じものとして評している。
- (7) 荊軻と聶政。『史記』「刺客列伝」に見える。
- (8) 『爾雅』「釋器」に「不律謂之筆」、注に「蜀人呼筆爲不律也」とある。
- (9) 『詩經』「小雅」の篇名。亡き父母に孝養を尽くせなかったことを悲しむ詩。
- (10) テキストの本文は「親哥哥」。黄霖編『金瓶梅資料彙編』（中華書局、1987）56頁では「親哥嫂」としている。
- (11) 第100回の回目は「韓愛姐路遇二搗鬼 普静師幻度孝哥兒」。韓愛姐が湖州の両親の元へ行く旅の途中で難儀していたところ、偶然に叔父の韓二に出会い助けられている。

- (12) テキストの本文は「甚矣，」（テキスト1頁）。第97回回評に「另出二搗鬼，以勸親兄弟中之全無良心者，」（テキスト1607頁）とあり、韓二を実の兄弟の中でも全く良心を持たない者としていることや、下文の『殺狗記』の内容等から勘案し、「仮の関係」「仮の関係を描くこと」について言うものと考えて訳したが、その文意は測り難い。
- (13) 明初の徐崑作の戯曲。富家の孫華が実の弟の孫栄を疎んじ無頼漢と親しくするので、妻が見かねて一計を案じ、殺した犬に 人の着物を着せて裏門に捨てておく。孫華は殺人の嫌疑がかかることを恐れて無頼の友に処置を頼むが、とりあってくれない。ところが弟の孫栄は危険をも顧みず死体を背負って郊外に捨てに行く。孫華は弟の誠意に打たれて行いを改めるというあらすじ。
- (14) テキストの本文は「《殺狗記》無此親切也。」（テキスト1頁）。前文から「仮の関係を描くこと」ひいては「仮の関係を批判すること」について言うものと推測されるが、その文意は測り難い。
- (15) テキストの本文は「世即有假聚為樂者，亦何必生死人之真骨肉以為樂也哉！」（テキスト2頁）。「苦孝説」に「夫人之有身，吾親與之也。則吾之身，視親之身為生死矣。」（テキスト12頁）とあることや、前後のつながりからこのように訳したが、自信がない。
- (16) 第1回の回目は「西門慶熱結十兄弟 武二郎冷遇親哥嫂」。
- (17) 第97回の回目は「假弟妹暗續鸞膠 真夫婦明諧花燭」。また、張竹坡は回評で「然則假弟妹，蓋又結十兄弟也。總之，此回已完。」（テキスト1606～1607頁）と述べ、第97回をこの作品の第一の完結と捉えている。
- (18) 第30回回評に「官哥兒，非西門之子也，亦非子虛之子，并非竹山之子也。然則誰氏之子？曰：鬼胎。」（テキスト465頁）とあり、西門慶と官哥とは実の父子ではないと捉えられている。また、蔡太師と西門慶は第55回で、西門慶と王三官は第72回で義理の父子になっており、第97回回評に「而假父子則已處處點明。桂姐之于

- 月娘，銀祖之于瓶兒，三官之于西門，西門之于蔡京是也。」（テキスト1606頁）とある。
- (19) 第32回の回目は「李桂姐趨炎認女 潘金蓮懷嫉驚兒」。この回で呉月娘と李桂姐が仮の母娘となっている。李瓶兒と呉銀兒も第42回で仮の母娘となっている。注(18)参照。
- (20) 注(16)参照。
- (21) 注(17)参照。第97回で春梅は、陳經濟を母方の従弟と偽って周守備府に同居させ、密通している。
- (22) 第97回回評に「至于假夫婦，滿部皆是，并未有一真者。」（テキスト1606頁）とある。
- (23) 王六兒・林太太・賁四嫂を指すものと思われる。
- (24) 「批評第一奇書金瓶梅讀法」86則で「書内寫西門許多親戚，通是假的。」とし、例として喬洪・翟謙・楊姑娘・花大舅・花二舅・沈姨夫・韓姨夫等があげられている（テキスト50頁）。
- (25) 「批評第一奇書金瓶梅讀法」86則に「敬濟兩番披麻戴孝，假孝子也。」とある（テキスト50頁）。これは陳敬濟（詞話本では陳經濟）が第63回の李瓶兒の葬儀と第79回の西門慶の葬儀で重い喪に服したことを指す。また第83回で陳敬濟は潘金蓮の母親の葬儀を行っており、夾批に「敬濟專門假孝子。」とある（テキスト1397頁）。
- (26) 前掲『金瓶梅資料彙編』57頁及び侯忠義・王汝梅編『金瓶梅資料匯編』（北京大学出版社、1985）10頁では「其假」としている。
- (27) テキストの本文は「弟」。
- (28) 注(6)参照。
- (29) 第100回で韓愛姐は月琴を抱いて湖州の両親の元へ旅をしている。
- (30) テキストの本文は「懷ヒ囊錘」（テキスト3頁）。校記によると、「ヒ」を「七」と誤っている版本があるという（テキスト4頁）。
- (31) テキストの本文は「怛怯」（テキスト3頁）。校記に、原版本では「恒怯」とするが誤りだとある（テキスト4頁）。

(32) 注(16) 参照。

(33) 温秀才は、第56回で初めて西門慶の話の中に名前が出現し、第58回で祐筆に採用されて西門家に引っ越して来る。鏡磨きのじいさんも第58回で登場するが、それは温秀才が西門家に引っ越してきた後であり、この部分の記述は物語の内容とくい違いが見られる。鏡に関しては「金瓶梅寓意説」に「如吳神仙,乃鏡也,名無爽,冰鑒照人無失也。」(テキスト9頁)という記述があり、冷の象徴として捉えられているようである。

(34) テキストの校記に、吉林大学図書館蔵本も大連図書館蔵本も「寒」と表記しており、「寒」を「韓」とするのは誤りだとある(テキスト29頁)。